

白光      ウィーン

「ムジーク・フェライン」と誇らしげに繰り返す頑固<sup>おやじ</sup>老人  
ちらりと感動の微笑と愛情の暖かさがのぞいていた  
私も思わず笑って肯く――ヤー、ムジーク・フェライン

右へ行って左に曲がったところ――

その指揮棒<sup>きしやうぼう</sup>のような指の動きからはそう読めて  
私は駆け出そうとしながら「ダンケ」ともう一度叫び、手を振る

＊

こんなに晴れ渡った空の下には未だ  
毛皮のコートと帽子に包まれた足取りと

寒い大気の中を素通りしてしまう澄明<sup>ひかり</sup>な陽光

ハアハアとその度に行きは白く、動悸には気圧の重み  
影の黒さも水彩画の如く淡く薄められている

そしてそれは目の前に建っていた、何気なく  
しかもオルガンの響きのように低く私を見下ろして  
この3つのガラス扉の向こう側にあるという  
カテドラルのような或神秘的な空間が、そしてそこで  
様々な自然と人間の織り成すハーモニーが響く

この内側で人々は凍えて縮まった感情の手足を伸ばす  
思いきり――胸の中に熱い何物かを溢れさせて  
山に囲まれたこの街に未だ春は浅いが  
今、私の足下から伝わってくるのは底冷えではなく  
湧き上がるような弦と管の音の奔流だった

(1984.3.30)